

# 陶工 横 萩 一 光

木 村 弘 道

## 序

横萩一光は明治時代に於ける陶工の中でも名工の一人として有名であるが、まだ纏った文献もなく、ようやく資料も消失しつつあるので、現在までに調べ得たところを紹介することとする。

今度調査のため方々を訪ねたが、横萩家の本家に当る富山県西礪波郡福岡町土屋5127番地の通信寺は、昭和24年4月7日に火災にあい殆んど総てを焼失してしまった。また京都市下京区清水3丁目317番地にあった横萩一光の家は、昭和26年12月29日に土砂崩れのため家屋が潰れ、少しばかり掘り出した資料も後始末に困り、昭和31年に屑屋へ払出してしまったそうである。

話によれば両家とも相当多数の作品やその他の資料・参考品・絵画等があった様であり、惜しいことをしたと誠に残念に思った。

普通一般には単に横萩一光と言っているが同じく一光と号して、その銘を入れた人が三人居り、初代・二代・三代とあることが解った。それは、

初代… 一 光・横 萩 金 三 郎

二代… 臥龍山一光・横 萩 徳 松

三代… 臥龍山一光・横 萩 一 造

である。然し、一般には一光と言えは二代及び三代を指して居て、徳松を初代とし、一造を二代としている様である。

いま金三郎を初代一光とし、徳松を二代、一造を三代としたのは、この三人の中初めから陶工として出発したのは、たしかに徳松及び一造であり、金三郎は始め彫刻家として立って居たのであるが、後陶工として活躍し、現に一光と銘を入れた金三郎の作品が存在するのと、金三郎・徳松・一造はそれぞれ血筋の通った親子の関係の人達で、これ等のことより考えて、やはり金三郎を陶工横萩一光の初代とし以下二代三代とするのが妥当だと思ふ。

然し、これ等三人の中で陶工として優れて居るのは、二代一光であるので、二代一光に重点をおいて本論を進めたいと思ふ。

その資料としては、金沢市役所及び京都市東山区役所にある除籍の原本に横萩家の戸籍がみつかったので、これや、富山県西礪波郡福光町役場にある加藤浅吉の除籍の原本を基礎にして現存の一光を直接識って居られる人々や、その子孫・親籍の人達より聞いた話を総合して述べて行きたいと思ふ。

## 家 系

横萩家の家系は除籍の原本によって見ても、又話を聞いても非常に複雑である。

聞くところによれば、これはよほど昔より伝統的と言ってもよいほどのものであったそうである。

陶工の横萩家の本家は、前述した如く運信寺の横萩家がそれに当り、その家系を遡れば、相当な名門の流れを引く家であるらしい。最も古いところまで遡れば、謡曲の「雲雀山」に出て来る横佩豊成にまで結びつくそうであるが、これは勿論伝説的な話であり何処まで信頼のおける話であるのか疑問である。然し、元は京都の名家の出であることだけは確かの様で、それが何時の頃か富山へ来て居着いた模様である。

陶工の横萩家が富山の本家より分家したのは何時頃なのかははっきり解らないが、横萩家の人達の言によれば、横萩金三郎の父は土谷玄道とか言って、元は富山藩に仕えて居たが、その後京都へ出て木屋町に住して居たそうで、玄道の職業は医師であったようである。

なお、横萩家の紋は「鶴丸」である。

### 初代 横 萩 一 光

#### 姓 名

初代一光やその父玄道の姓を一般に土谷と言われて居るが、それは土屋村の出身であるため土屋の一光とか玄道とか言っていたのが、土谷となった様である。勿論これは俗称であった様で、初代一光は除籍の原本にも横萩金三郎となって居り、正式の姓はやはり横萩である。

又、金三郎を時々錦三郎と書かれて居たりするが、錦の字は金の誤りであり、一光は号である。

#### 略 歴

出生の年月日は詳かでないが、出生地は京都でないかと考えられる。それは玄道が京都の画家駒井某の娘と、京都で結婚し、その後富山藩に仕えた様子であるからである。

彫刻に長じ、製陶をも良くし、天保の頃唐津師（陶工）として富山藩主前田利保の招聘に依り、富山市寺町の某寺に仮寓し、御徒組外の一員であったそうであるが、陶工兼木彫家として細工者の一員であったと思われる。藩主からその非凡な力量を嘉されて一光の号を賜ったと言うことがある。彫刻や製陶の法は京都で教わったものと思われるが、その師は誰か解らない。

安政5年富山県西礪波郡の埴生焼竹亭窯で製陶を助けたが、文久元年辞去し、同年同郡坂本村に於て創窯した。

埴生焼竹亭窯と言うのは、埴生村の太田家21代の佐次兵衛が竹亭と号し、安永初年頃庭内に窯を築いて、大樋焼に倣って楽焼を作ったのが初めて、三代柳山が文久2年に病歿するまで80余年間続いた窯である。

坂本焼は初代一光が当時富山県福光町の素封家中村屋の後援で広瀬村字坂本・星場山・法雲寺東方約50間の箇所（註）に窯を築いて陶業に従事したのが起りであると言われている。

ここでは日用の雑器類や人形の如きものを造った様であるが、数カ月の試焼の程度であったため遺品は殆んど残存しない様で作品について確かなことは解らない。初代横萩一光が坂本村

に来た時は、男女二児を伴って居たそうで、徳松は12才、姉の「ゆか」は14才であったと言われている。

その後文久年間に加賀藩主前田斉泰の招きに応じ、御用唐津師として米沢したが直に木津焼に関係した。木津焼というのは、石川県河北郡木津の豪家であり、御倉番所であった室本家が初代横萩一光及び京都から陶工数名を招いて、陶窯を開き、京都の粟田焼風の陶器を製した。藩主前田斉泰も桃の花見等の折りこの窯場を訪れたこともあったということである。時の人はその製品を木津焼と称したが、製品は総て無印であったそうである。

種類は・鉢・火鉢・行燈皿等の日用雑器の類が主で、雅品の類は少かった様である。

明治4年この窯は廃されたが、同12・3年頃まで窯が残っていたそうである。

一光がその木津焼に関係したのは、一光が偶々河北郡秋浜村の道安寺に遊びに来て居たのを当時道安寺と親戚であった室本家が招いたのだということである。

又その後金沢の鶯谷の辺に於いて製陶に従事したこともあった様に言われているが、鶯谷どの窯に関係したのか、確かなことは解らない。それもほんの暫くのことで、京都に赴き歿した様である。

歿年については、今迄は明治15年に75才で歿したと言われていたが、今度調査した結果では、どうも横萩家に明治15年に歿した人は無く、行年の75才も何を根拠として、その様な事が出来たのか解らない。

金沢市役所にある二代一光・横萩徳松の除籍の原本によれば、

前戸主 横萩金三郎

戸主 横萩徳松……亡父 金三郎 長男

文久3年9月7日相続

と書いてあるから、文久3年9月7日以前に前戸主 横萩金三郎は歿したことは確かである。

三代横萩一光の妻「阿以」の話では、祖父の命日として法事を22日にして居たそうであるから、22日に歿したのであろうと考えられる。

なお、以上の事でも解る様に初代一光が竹亭窯を辞去してから、坂本焼・木津焼・鶯谷の窯それから京都と転々と歩いているが、その間は僅か2カ年と一寸位いの期間で、何処も皆ほんの数カ月づつであった様である。特に坂本焼などは本当に暫くの間で、竹亭窯を辞したのが、文久元年でその後直に坂本焼を起し、同年中に更に木津焼を開窯した様である。

## 作 品

初代横萩一光の作品は一般に試作品或いは日用雑器類であったためか、現存するものは極めて少なく、又殆んど総べてが無銘であったためか、不明の点が非常に多いのである。現存する作品としては、横萩家の本家に当る運信寺に布袋の置物があり、これには一光の印が捺してある。これは初期の作品で、運信寺の裏庭に小さな窯を築き、試焼をして居た頃の作品である。元来彫刻家であったため、彫刻はなかなか良く出来て居り、数少い初代横萩一光の作品の中で初期の代表作の一つであろうと思われる。

その他少数ながら、まだ作品は現存して居る様である。又彫刻の方の作品も、木彫の小品等もある様であるが、これ等も殆んど総て無銘のものである。

## 二代 横 萩 一 光

### 姓 名 と 号

二代横萩一光は幼名を徳松と言ったが、金沢市役所の除籍の原本によれば、

明治23年8月22日願濟改名

とあり、徳松を消して横に一光と書き込んであることから、父金三郎の雅号であった一光を本名に改名した事が解る。

この改名の動機は、徳松ではどうも陶工らしくないと、かねがね自分もその様に思っていたところ、偶々言う人があったので、当時近所に居た、役所の戸籍係りに勤める人に頼み、改名の手續をしてもらったのだと、当時の事をよく識って居られる、陶工の富田忠男氏は言っている。

それ以後雅号は、臥竜山一光と称した。臥竜山とは金沢城の東にある卯辰山の別名である。

### 家 庭

前にも述べた如く、横萩家の家系は、非常に複雑であるが、二代横萩一光の家庭も同様に大変複雑である。

これらは或る意味では、総て二代横萩一光の個性を形成する上に於て、何等かの影響があった事は確かであると思う。又今後の横萩一光研究に何等かの手掛りとなるかも知れないと思ひ少し繁雑になるが、以下述べてみる事とする。

除籍の原本に現われただけでは、二代一光は、初代一光・金三郎の長男であることだけで、母や兄弟等のことについては、何も記載してなく、全く解らない。

然し、三代横萩一光の妻「阿以」の話によれば、金三郎は何度か妻を変えて居り、先妻の名や、その他のことは一切解らないが、金三郎と先妻の間には、「つね」・「みか」・「やえ」・「まさ」等の女の子があり、二代一光は姉の「ゆか」と共に、後妻との間に出来た子であったようである。

「ゆか」は越中の陶工加藤浅吉の母であると、聞いていたので、富山県西礪波郡福光町役場の除籍の原本を調べたところ、加藤浅吉の戸籍で次の様な事が解った。

本籍 富山県福光町大字福光村7434番地

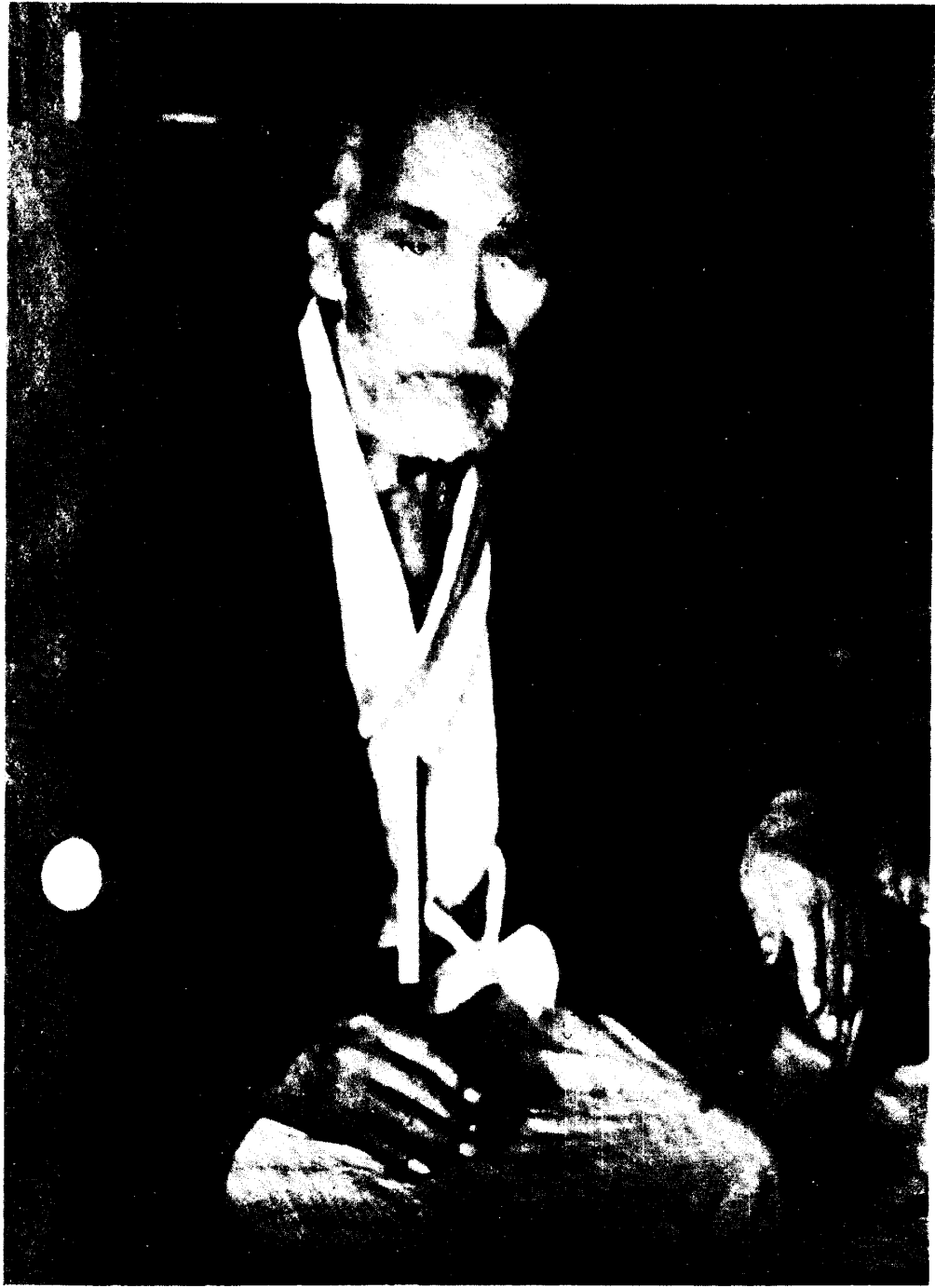
戸主 平民 加藤浅吉 …父五兵衛 長男

明治3年10月27日生

昭和11年3月2日歿

父 五兵衛… 亡祖父 五兵衛 長男

天保11年2月8日生



(1) 二代横秋一光の写真（死後数日前の撮影）



(2) 初代一光の布袋の置物（運信寺蔵）一尺ばかりの大作で、右手の上に玉が乗っていたが、今は損失している



(3) **東金山城** の銘が入っている手鉢で、二代一光の代表作  
生地は赤味を帯びた茶色で、黄味を帯びた白の化粧掛けをし、外側に松の粗画を染付で描いてある。内側にも白の化粧掛けをしてあるが、細い貫乳が入ってやや赤味を帯びており、淡く茸の粗画の様なものが染付で描いてある。化粧掛の仕方も面白く、中などは三分の二程掛けて他は生地の色を生かしている。持手は無理がなく付けてあり、全体との調和がよくとれている、生地の出ているところは緑がかつた深味のある茶色である



(4) 二代一光が筆洗にしていた湯呑茶碗、染付で描いた山水の絵は非常に巧みで、好標本である



(5) 三代一光の捻りで造った締瓶の土瓶で薄手に巧みに造っており、摘みは松毬で出来ている



(6) 二代一光が関係していた御辰山  
婆の銘の一つ、この他にも数種の  
窯印がある



(7) (3)の印、一光の別印と思われる



(8) 二代一光の捻りで造った締焼の  
急須の印

一光



(9), (10), (11), (12), (13) 二代一光の作品の印、実物の印を紙に捺したもの、図はその実物大である。(10), (11), (12), (13)  
は四種類の 大きさを示すためにのせたもので、 (一光) や 一光 の印もこの様に四種類位のものがあつた様であ  
る



(14) 安曇焼で二代一光が造つた仙人の置物（斎藤家蔵）の、釘彫りで一  
光造としてある



(15) (4)の銘、染付で臥龍山一光造と  
書いてある



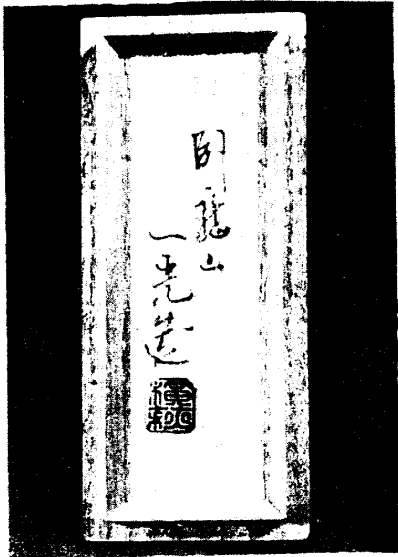
16) 二代一光の箱印



17) 二代一光の最初に影つた大きい方の布印



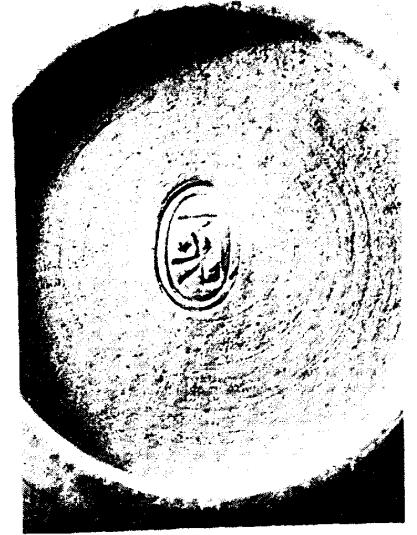
18) 二代一光の後に影つた小さい方の布印



19) 二代一光の箱書



20) 三代一光が若い頃に用いたの印



20) 三代一光の印，縁が二重になっている



22) 三代一光の箱印



23) 三代一光の布印



24) 京都伏見桃山の善光寺雲竜寺にある横萩一光の墓



大正5年4月30日歿

母 ゆか 父 五兵衛 妻

弘化4年正月20日生

明治22年1月29日歿

本郡前田村・平民・北野次郎兵衛・妹入籍ス

これで見ると、年月日は解らぬが、戸籍上では西礪波郡前田村の北野家より加藤五兵衛へ嫁に来た事になる。

この点を、加藤浅吉の長女である中谷ふみ氏に問い正したところ、五兵衛の時代、加藤家は麻の商いをしていたので、その商いのため京都に行っている中に、横萩家と親しくなり、「ゆか」を嫁に貰う事に定めたが、昔当地方は、遠方より嫁を貰った時は、血統とか家柄等を非常に煩く言うところなので、当時加藤家は前田村の村長をしていた北野氏と親しかったので、北野家に頼み「ゆか」の籍を一度北野家へ入れ、それから加藤家へ嫁入ったのだ、と言うことを聞いて居るとの事であった。

二代横萩一光も何度か妻を変えて居り、戸籍上に現われている最初の妻が、後妻「もと」——或いは「元」とも書く——で除籍の原本にも、後妻と記入してあるところから、前に既に妻を貰った事があることは確かであるがその人については何も解らない。ただ「ゆき」と言う女の子があった様であると、三代一光の妻「阿以」が言っている。

「もと」は、万延元年3月10日出生で、滋賀県滋賀郡別保村の士族・浅野逸摩の長女で、明治19年10月13日に入籍している。

二代一光と「もと」との間に出来た子は三人あった様である。

長男 金治郎 明治13年4月5日出生

二男 光 治 明治16年4月19日出生

三男 一 造 明治19年2月12日出生

除籍の原本には長男及び二男の母は不詳となっているが、「阿以」の話では、三人共母は「もと」で金沢に於て生れたとのことである。

三男一造の母は除籍の原本でも浅野元となっていることより見て、或いは「もと」は数年間籍を入れずにあったのを、一造が生れてから入籍したものかと思われる。

然し、「もと」は明治22年7月18日に離婚している。そして翌年の明治23年2月12日に、富山県福光町から、加藤浅吉の姉即ち、父五兵衛と母「ゆか」の間に出来た、長女「のゑ」明治元年4月19日出生が後妻として入籍している。

「のゑ」との間には長女「須賀」明治25年11月19日出生がある。然し、前述の如く、「阿以」が言うように先妻との間に「ゆき」があったとすれば、「須賀」は或いは二代一光の二女で

あったかもしれないが、戸籍上では長女となって居る。「須賀」も金沢で生れたそうである。「のゑ」は明治30年3月10日死亡している。その後又、明治37年10月6日に、金沢市千日町67番地・父・石川藤兵衛・母・不詳・長女・石川外次郎・姉「多け」文久2年9月20日出生が婚姻入籍している。

「多け」は大正13年10月26日夫一光の死亡後大阪市住吉区山王町3丁目62番地に住み、昭和15年9月15日同番地に於て死亡している。届出は同居者の糸井繁蔵がして居る。当時繁蔵の妻は「須賀」である。

以上が二代一光の妻について述べたのであるが、以上でも解る様に二代一光の妻として現われる人は、少くとも四人以上はあることになり、その間に出来た子供達と織成す家庭の状況は大変なものであったと想像される。

次に、これ等兄弟達の事を見ながら、陶工として、三代横萩一光を次いだ人の輪郭を見て行く事とする。

長男金治郎は、大正13年3月5日、京都市下京区本町3丁目110番地に於て死亡し、戸主の一光が届出をして居る。当時一光は、東山区清水4丁目161番地に住して居るから、金治郎は何時の頃からか、別居して居た様である。

金次郎の正式の妻としては、戸籍上には現われていないが、内縁の妻があり、姓名は、森ナラキクと言うが、他のことは解らない。その間に出来た子供が六名か居た様である。いずれも戸籍上では、一光の孫・金治郎の庶子となっている。

初 枝 明治43年2月12日出生

光 雄 明治44年11月25日出生

実 大正2年9月2日出生

津 ぎ 大正4年10月18日出生

忠 次 大正6年10月24日出生

信 大正9年7月6日出生

の四男二女がある。

次に二男光治は、明治41年3月14日兵庫県神戸市兵庫須佐通り2丁目13番地  
戸主 平民 柴垣利八 妹

父 柴垣利平 母「きみ」 三女

「ふさ」明治16年6月6日出生と婚姻して居る。子女は、

長男 光 尾 明治41年3月26日出生

長女 喜代子 明治44年5月21日出生

二女 美代子 大正2年7月20日出生

二男 正 一 大正4年4月1日出生

がある。

三男一造は大正5年1月5日に、京都府紀伊郡伏見町字新町10丁目368番地 戸主 吉水ヤエと養子縁組したが、大正6年12月3日に、協議離婚し復籍している。

大正8年5月21日受付で、京都府紀伊郡伏見町字平野85番地 戸主・久保田久治郎・姉「阿以」

父 久保田房吉 母 「ワキ」

明治26年6月19日出生が妻として入籍している。

一造には子供が無かった。

長女須賀は明治37年9月30日に、金沢市梅本町1番地の2 平民 徳光モトと養子縁組しているが、翌年の明治38年4月17日協議離縁している。

その後、同年の10月9日に石川県鹿島郡七尾町字常盤町1番地の1 戸主・佐波喜三郎と養子縁組し、明治41年12月14日に協議離縁して復縁しているが、同年同月の28日に京都市下京区三条通大橋東入4丁目七軒町21番地へ分家して居る。

なお、除籍の原本には、項目を改めて、次の様な事が書き込んである。

下京区三条通大橋東入4丁目七軒町21番地 横萩氏廃家 元戸主・横萩一光長女入籍届出  
大正9年9月30日受付。

「須賀」はここにしばらくいたが、

大正15年10月29日に大阪市東区紀伊国町906番地 戸主・糸井繁蔵と婚姻して居る。

以上が除籍の原本を元にして見た、二代一光の家庭であるが、これでその複雑な状態はほぼ推察することが出来ると思う。

### 略 歴

二代横萩一光は前にも述べた如く、幼名を「徳松」と言い、父初代一光・金三郎と後妻との間に出来た子で、嘉永3年6月20日、金三郎の長男として生れた。出生地は京都五条坂であると言われる。陶法ははじめ父に就いて学んだようであるが、京都五条坂で誰かにも習ったようである。

又鶯谷の陶工富田忠男氏が二代一光に聞いたと言う話では、一光は若い頃京都錦光山のところに暫く居たようなことも言って居たそうである。

文久3年9月7日に父金三郎死亡により、該業を伝受され、慶応3年19才にして京都五条坂に於いて開業したと言われる。然し、それはほんの暫くの間で、明治元年頃金沢市の卯辰平兵衛なる者の依頼を受け金沢に来て、同人の陶磁器工場にて該業を施行した。

この窯は卯辰山焼と言われて居り、安政のころより明治初年まで卯辰山の瓦師平兵衛が瓦窯の前窯を利用し、横萩一光を始め、京都の玉鉾亀吉及び原呉山・野崎佐吉等をして作らしめたもので、製品は概ね染付とか鉄錆にて雅画を付けたもので、稀に上絵付のものもある様で、気韻高尚で木米作を偲ぼしめるものもある。

瓦師平兵衛は代々同名を襲ぎ明治に入ってからには渡井を姓とした。初代一光が暫く鶯谷の窯に関係したと言うが、その窯は或いはこの平兵衛の窯でなかったかと思われる。

明治3年依頼により、もと父金三郎が関係した木津窯を再興し、是に居を転じて一カ年許り営業した。

同4年再び金沢に帰り鶯谷久田窯を譲り受けて、鶯町7番地に住して製陶をはげんだ。

この頃には製品はいよいよ識者にも認められて、販売面も非常に良かったようであるが、何か事故があって明治7年8月頃閉業して京都に登り元の五条坂に於いて開業した。そのころは数名の弟子もあったとのことである。

明治14年に門人の中川浅次郎を伴い三度金沢に来て旧窯を再興して製陶しながら、石川県勸業場の工手をも勤めていたそうである。然し、この7・8年の期間は籍等も京都へ移したりはして居ないようで、或いは京都と金沢の間を往復して居たものかもしれない。

二代一光が本当に金沢を離れたのは明治29年で籍を移したのは明治39年12月のことで、これは前述した如く長男金治郎、二男光治、三男一造、長女須賀の子供達も皆金沢で出生して居ることで解る。

明治15・6年頃には、富山県<sup>ヤツスイヤキ</sup>安居焼の市右衛門窯を指導に行っている。安居焼と言うのは西野尻村安居の人齊藤市右衛門が、農業の傍ら瓦業を営んでいたが、偶々二代一光の来遊によって陶業を志し、附近の陶土を以って日用雑器類を製出したのが始めである。

陶工としては二代一光及び一光の姉加藤ゆかや中川浅次郎等も関係したようである。この窯は明治22年頃に廃窯したそうである。

なおこのころには、原呉山に楽焼等について教わる場所があった様である。呉山は多芸多才の人で、和歌・俳諧・点茶・香道・書・画・製陶等々皆堪能な人である。

一光が呉山を識ったのは、卯辰山焼時代の明治元年頃、既に親交があった訳であるから、相当地に長年の間、深く交わった模様である。

一光が楽焼等について教わる場所があったと言うのは次の様なことであろう。一光は当時既に陶工としては一人前であり、単に技術上の事ではなくて、一光は呉山に茶道を習って居た様なので、その茶道を通じて楽焼の趣味について教わる場所が多かったものと思われる。

又呉山は一光に本焼等に就いて教わる場所が、多々あった様でお互に友人として影響しあったものと考えられる。

大体呉山は製陶に於いては、自ら手を下して製作に当る純然たる陶工と言うより、窯本又は当時の識者或は、今日のデザイナーの様な性格を持った人であった様である。

いずれにしても一光も呉山の様な秀れた人と交際があったことは、一光自身の芸術の育成のためにも非常に良い影響を及ぼしたことと思う。

ここで一寸鶯谷の窯について考察をしてみたいと思う。

鶯谷の窯は明治4年頃旧藩士の前田肇と久田宗兵衛の両人が発議して、開窯したものである

が、一カ年もすることなく、ほんの暫くで資産の大部分を使い果してしまっただけで、同年に二代一光がその窯を譲り受けて居る。

明治7年に一度閉窯し、10年頃には鷺谷庄平に譲って居る。庄平はその後暫くして、京都へ製陶の法を学びに行き、1・2年の後帰ってから、庄平自身が窯を焼いて居る。

然し、明治14年には一光が又その窯を使っている様である。然し、庄平が明治18年に窯を野崎佐吉に譲ってからは、利用出来なくなったものと見えて、一光は近くの観音町に窯を築いている。

以上でも推察出来る様に、この10年より18年までの窯が庄平の名義になっていた間は、共同で窯を使用して居た様である。であるから、ここでは一光は二つの窯で仕事をした訳である。先のは一般に鷺谷窯と言われている鷺谷の久田窯であり、後のは特に名称は無い様であるが、観音町の一光窯とでも称すべき窯である。

後年土砂崩れのため使用不可能となって、京都へ行く事になったその窯は観音町の一光窯である。

一光はその後明治26年頃に越中焼の指導に行き居る様である。

越中焼とは、明治26年頃に、福光町在高宮村の地内に於て創められたもので、元富山県の土木吏員であった福光町の吉崎権吉が発議し、般若村字頼成村の素封家高島馨の投資によって輸出向の陶器を相当大規模に営んだ。

陶工としては二代一光を初め石川県能美郡八幡の幡山・山崎兵松や、金沢の含山・和沢橋三郎、福光町の文庫・加藤浅吉等が加わり着画師として富山市の画家木村立峯も招かれて、絵付をした様である。之れを土地の人達は頼成焼又は高宮焼と呼ぶこともある様であるが、製品には多く越中焼と記入した小判形の印を捺してある。

その後黒川某外、二、三の人々が代って製陶したが振わず廃窯した。

その後はもっぱら観音町の窯で製作した模様で明治28年8月22日に旧名の徳松を一光と改名して戸籍上の訂正をなしており、この頃が最も製作欲も旺盛で快心の作も出来、その意気込の程も大変なものであったと思われる。

明治29年の金沢地方の大洪水の時土砂崩れのため、窯が大破し修繕不可能になったので同年12月京都に赴いた。

土砂崩れのその日は丁度窯詰の終わったばかりで、窯も一光自身が築いた窯なので大変悲観した事と察せられる。当時近所に居た古老の話では、大音響とともに地響がして何かと思ひ外に出た所、「一光さんの窯が崩れた」と大変な騒ぎであったそうである。

その後時には金沢地方へ来ることはあっても金沢で製陶をすることは無く、京都市下京区清水3丁目317番地に住し、五条坂で製陶をした。籍も明治39年12月6日に、京都へ移している。

除籍の原本によれば、大正13年10月26日午前零時20分本籍に於て死亡し、同居者の横萩一造

が届出で、同月30日に受付したと記してある。

一光の墓は、京都の天台宗伏見桃山善光寺龍雲寺にあり、墓には一光院釈龍華と正面に法名を、右側面に昭和5年10月建之、左側面に二代横萩一光と彫ってある。この墓は三代一光の一造が父二代一光の供養のために建てたもので、「阿以」達の話では、初代一光金三郎の遺骨も一緒になって居る由である。

然し、この墓というのは、実は横萩家とこの寺院とは宗派が違うのであるが、住職と親しい間柄であったので、特にこの寺に御守をしてもらうために建てたものということである。それであるから、この寺の過去帳に一光の事項は記入してない。

一体陶工の横萩家は、寺院の出であるのにもかかわらずこの方面のことに就いては、運信寺にも全然何の記録らしいものも無い様であり、三代一光の妻「阿以」や親戚の人達に尋ねても本当の寺院は何処なのか解らない。法要は、親しかった金沢出身の僧であった熊谷師に、してもらって居たそうである。

過去帳等を調べれば、不明の点が尚明らかになると思っていたが、上記の様な次第で金三郎の法名もわからない。

## 銘

卯辰山の瓦師兵衛の窯に關係して居た頃は、この窯の陶印である「卯辰」・「卯たつ」・「卯辰山」或るいは「上を兎の絵にし、下に辰と書いた」印を捺しているものと考えられるが然し、この窯には前述した様に他にも数名の陶工が關係しているので、この銘の入っているものはすべて一光作とする訳には行かない。


又この時代或いは次の鶯谷久田窯の時代のものかと思われるものに、東金  
山城の印の入ったものがある。この銘の入った作品については、今迄は誰の作であるか良くわからなかった様であるが、水指でこの印と同時に一光の印を併用した品があるところより見て又この銘の入っている作品に佳作が多く、作風の上から見てもこの銘の入った優秀な作品は一光の造ったものと考えて良い様で、或いは一光の別銘ではないかとさえ思われる。


鶯谷久田窯の時代からは正式に自分の雅号を入れ、小判形の印一光及び縁のない一光の印の捺したものが多く、時には「一光造」・「臥龍山一光造」等と釘彫り又は染付でしたものもあるが、字が得意でなかったためか、非常に少く「一光造」としたものの例としては、富山県安居焼市右衛門窯で作ったものと思われる齊藤家蔵の仙人の置物等があり、「臥龍山一光造」と染付で書いたものの例としては、一光が筆洗にして居た湯呑茶碗等がある。これは中の釉薬が溶けず失敗作であるため、筆洗に使ったものであるが、外側の絵等は非常に良く出来ている。又、釘彫りにしたものには運信寺蔵の急須などがある。その他釘彫りで銘を入れたものは観音等の置物に時々見受けられる。

60過ぎてからは、縁のない一光の印と共に専ら瓢箪形の中に一光と書いた一光の印を使用し

た様である。

これ等の(一光)の印は大中小四種類位であった様である。一光は殆んどすべて銘には印を用いたためか、作品に製作年等を入れたものは全く無い様に思われる。又共箱のものは割合少ないが、共箱のものには「臥龍山一光造」又は単に「一光造」と書いて、箱印を捺している。中には箱印だけのものもある。

箱印は四角の縦13耗、横12耗の印で、縦に横萩とした印  であり、四角い縁の右肩と、左肩下が一寸欠けているのが特徴である。

布印は四角の  とした印である。印材は、蠟石であり、その上下両面に同じ様な印を彫ってある。片方の印の大きさは、縦横17耗でもう一方の方は縦横20耗である。20耗の方は、最初に彫り失敗したので、又17耗の方を彫ったものと思われる。だから布印に用いた印が二通りあった訳であるが、大きい方はほんの暫く使っただけで、その後殆んど総ての場合小印を使用して居た様である。

これ等の作品に直接捺した印以外の印はすべて黒の印肉を用いた。

## 作 品

### (I)

二代一光は元来が器用な人であつたらしく、同じく陶工と称せられる人々の中でも、最も幅の広い人であり、凡そ陶磁器製作上の技術は、殆んど総てを完全にマスターして居た様に思われる。恐らく近代日本の陶工の中でもこれ程迄に何から何まで全部を自分一人で出来た人は本当に尠かろうと思う。作品は、締焼風のもの、染付、上絵物、あらゆる種類のもを造って居る。又、轆轤は大変な名手であり、捻り物も全く名人である。

絵は初め、高村右暁氏に習った様であるが、高村氏も「一光は絵の上達も早く非常に上手であつた。」と言って居られた。

今、その作品を時代的に見た場合には、最も初期のものは非常に遺品が少く、又無銘のものが多かつたためか不明の点が多いのであるが、現存の作品からその作風によって、大きく分ければ、前期の金沢時代と後期の京都時代の二期に分類することが出来、その前期は更に卯辰山時代と鶯谷時代の二期に分けることが出来る様に思われる。以下時代順に考察したいと思う。

一光が初めて陶工として一人立ちした最も初期の時代に当る文久・慶応年間の京都時代の作品については全く解らない。然し、この時代既に相当な腕であつたであろう事は直ぐ次の時期に属する卯辰山時代や鶯谷時代の作品からほぼ推察することが出来る。

卯辰山時代の作品は、雅品を主とし、鉄砂で粗画を画いた染付物等が多いのであるが、織部風のものや焼締のみの物もある。一体に大皿類が多く、小品には香合や盃等が現存し焼締には掛花生等がある。当時の一光は単に卯辰山焼に雇われた陶工に過ぎなかつたために卯辰山焼の

窯印を捺し自分の銘はあまり入れていない様で、もしあっても極めて少ないものと思われ、その中から実際に一光の作品を鑑別する事は非常に困難である。然し、この卯辰山焼の最も重だつた陶工は一光であつたと考えられ、これ等の製品の中優秀な作品には作風の上から考えても一光作として良い様に思われるものもある。これに反し 東金  
山城 の印の入つた作品は一光の特徴がよく出ていて明らかに一光の作品と認定出来るものが多い。作品の種類は、ほぼ卯辰山焼と等しいが大皿類は少く、鉢や手鉢、水指、茶入、掛花生等があり、これ等の作品の中には作行きもよく、上品で雅味を具えたものがあり、その上出来の物は鑑賞陶器としても最高部に属する様に思われる。

卯辰山時代と次の鶯谷時代との間に木津焼に、関係したのであるが、木津焼は総て無銘であつたらしく、ここでは一光も全々銘も入れて居ない様であり、木津焼そのものが不明の点が多く、ここで造つた二代一光の作品はどの様なものであつたか確かな事は解らない。いずれにしても、初代一光が関係していた時と同じ様に、日用の雑器類が主であつて、雅器の類は少なかつた模様である。二代一光が木津焼へ行つた頃は既に時代は明治の新しい社会に変わりつつあり、窯本の室本家も藩政時代には何かと藩主前田家の庇護もあつてか、栄えていたが当時は昔日如くではなく、窯を維持して行く力はもはや無かつた様である。

このような状態で一光もここでは十分に腕は振えなかつた様に思われる。したがつて一光はここにはほんの暫く居ただけで、明治4年には帰沢し鶯谷久田窯を譲り受けて、自営する事になり鶯谷時代が始まつた訳である。

この時代から作品に一光の銘を入れ、芸域も非常な発展をし、一光芸術の型が出来て来たと考えられ、生来の器用さは充分に発揮されている。一体に一光は時には器用過ぎてそれが却つて欠点となつて現われる傾向があるのであるが、この時代はその器用さが非常によく生かされて居り、一光の全生涯の中でも最も充実した重要な時期である。

一光の作品には一見、全く相反する様な性格をもつたものがある。その一方は締焼或いは染付等で粗画や模様を描いたり、又は、瀬戸風、織部風と言つた様なもので「わび」又は「さび」に通ずる渋いところを狙つた作品と、その反対にいわゆる仁清風という上絵の精巧で煌かなものとのである。然し、これは一光の陶工としての幅の広さを示すもので、よく見ればそこに一環した個性の現われていることが解る。

卯辰山及び鶯谷の金沢で製陶をした時代のものは一般にその雅味を狙つたものが多く、当時は友人に原呉山の様に秀れた人もあり、その影響もあつてか非常に品格の高いものが出来ている。一光は絵が上手であつたので、鉄砂等で粗画を描いたものの中には実に雅味豊かなものがある。又、一品に種々の釉薬を使い分けして景色としたもの等、金沢時代の作品の性格は来沢早々関係した卯辰山焼で基礎づけられその発展であつたと考えられる。

この鶯谷時代は、前述した如く旧の鶯谷の久田窯の時代と観音町の一光窯で仕事をした時代とがある訳であるが、この二つの窯で出来た作品を現在でははっきり鑑別することは殆んど不



可能で、大体に於いて同じ様な作風のもので一光窯は久田窯の延長であったと考えても良いのではないかと思われ、作品の上からは一括して鶯谷時代と言っても良い様である。なお、この間に一光は石川県勸業場や、安居焼・越中焼にも関係して居り、一品製作的な雅品或いは美術的陶磁と言う様なものを製作した外に、産業的に日用雑器類を主に焼いた窯場の指導をして居ることは注目されることである。

安居焼は、水甕や壺の様な割に大きなものを相当に焼いた様である。この様なものは勿論無銘であり、大体に於て安居焼等の銘も入れた品が有ったかどうかは疑問で或いはその様な銘は全く入れなかったのではないかと思われる。然し、一光自身が造った作品で、時には一光の銘を入れたものもある。安居焼で一光の代表作は齊藤家蔵の仙人の置物ではないかと思われる。この作は陶彫としてもなかなか良く出来たものである。

越中焼は安居焼と違って、水甕の様なものは、余り造らず海外への輸出をも目指した様であり、大きいものでは花瓶の様なものがあつたらしい。その他鉢・皿・茶碗・盃等相当に造った模様で、その意気込もなかなか大変なものであつた様で、木村立峯の絵付をした花瓶等には「大日本越中焼」と落款したものもあるそうである。

以上で金沢時代を終えて次は京都時代へ移る訳であるが、京都時代は専ら仁清に私淑し、仁清風のものが作品の主流をなして居り、茶碗・香炉・香合・水指・皿等多種多様のものを作って居り、絵付も山水・花鳥等種々のものを描いている。画風も南画風のもの又、光琳風のもの等その器物に応じて描いているが、光琳を非常に尊敬していたので光琳風の絵付をしたものが多い様であり、この種のものでは茶碗などで非常に秀れたものがある。又、金銀を入れ小紋を丁寧に描いたりした非常に美しいものもある。仁清風のもの、本当に隅から隅まで神経の通った、むしろ綺麗過ぎる様なものを作って居る。この点一寸華奢でやや器用さがたたって居る様な感がするものもある。

然し、急須の抓等に禽獣を甚だ繊密に彫刻したものが有り、これ等は一光独特のものである。

京都時代にも勿論締焼風のものも造つたが、中でも特に面白いものは、絵変りの10枚、20枚等の揃いの皿ではないかと思われる。その他仁清風のもので一尺程もある雉子や、鴛鴦等の置物や、数尺の屏風等も造つた様である。又、禽魚の形の香炉や香合等を作って居るが、これ等は実によく出来て居り、この種のもは真葛以外、他に類を見ないものである。仁清風のもは一般に型は端正であるが、生地はやや黄色味が掛つて居り、細かい貫乳が入つて居るので暖かみのあるぽっこりした感じを与える。この様に一光の作品は、カチカチになりやすい様なものを造りながらも何処かに息抜きをすところがあり親しみやすさを感じさせるのは最も秀れた点の一つに数えることが出来ると思う。

なお、この時代には型物をも相当に造つて居り、それには香合などが多い様である。一光は花鳥を絵付をしたり、捻り物で動物を作つたりする時には動物園等に行き必ず多数の写生をし

て、頭の中に入れてから製作に当たったそうで、一光の長女「須賀」も幼い頃よく動物園へ一緒に連れて行ってもらった記憶があると言って居られた。

それであるから急須の爪や、香炉等に付けた禽獣は全く驚く程巧に出来て居り、或る時などは鉢の縁に鼠を彫刻してあったのを、女中が本当の鼠と間違え、その鼠を追い払おうとしてその鉢を毀した事などは実際にあった様である。

一光は一般に動物が好きであったが、特に鳥類を好み、又作るにも巧みであった様である。一光の作品中特に重要な部分を占めるのは、捻り物であり金沢時代から作って居るが京都へ行ってからは、特に多く作って居り晩年轆轤を廻すのが大儀になつても捻りで種々のものを作った居たそうである。それは置物等は勿論急須や盃等小さなものから相当に大きな水指まで非常に器用に薄手のものを造っている。この様なものは、他の陶工には見られない一光独特のものである。

一光の作品は、捻り物でも轆轤物でも薄手であり、そこに妙技を発揮して居る。例えば一光の造った急須などに湯を入れた時外側よりそれが透けて見える、とまで言われるのはその薄い事を言い現わしたものである。轆轤は確かで、数個の茶碗などは、秤で計っても皆同じ重さに造って見せると豪語して居た程に自信を持って居た。実際に作品を見ても実に器用に挽いて居り、手の切れる様な感じのものがある。

一光の作品は一般に皆すっきりとして居り、本当の玄人が造ったと言う感じで、何処を探してもたどたどしいところなど少しもなく、何か安心して見られる感じのものである。

画家の高村右暁氏は、「一光は名工であった。」と、又陶工の富田忠男氏も「一光は捻り物の全く名人であった」と捻り物を造る時の手つきまでして賞讃して居られた。

## 作 品

### (II)

## 茶 碗

現存の抹茶碗は仁清風が多い様であるから京都へ行ってから多く製作し金沢時代のものは割合少ないのではないかと思われるが、種々の絵付をしたものがあり、中でも光琳風の絵付をしたものの中には実にすばらしい出来のものがあり一般に作行に街がなくすっきりとして居るところに好感がもたれる。

煎茶碗や湯呑茶碗になると、種々の焼き方をしたものがあり、染付のものなどには古淡な味をもったものがある。

これ等は金沢時代・京都時代の両時代に造って居るが、これも京都時代のものの方が多く現存して居る。

## 香 炉

一光の造った香炉の上にはよく禽獣が戴っており、それが実に生々としたのに出来て居る。打ち出の小鍬の上に鼠が戴って居る香炉があるが、これ等は非常に細密な仕事があり、一光の特徴の良く出た作品の一つである。又鼻の香炉があるが、形も面白く色も実に良く出来て居り、この香炉は蓋を後向にすると鬼の顔になって見える変わったもので、佳作の一つであろう。一般に品のよい、やや華奢な感じのものを造っている。

## 香 合

禽獣の形をしたものが非常に多く特に鳥の形をしたものには傑作があるが、中でも鯨の香合があり、これなどは形も着色もよく出来ている。金沢時代のものは捻りで作ったものが多いが、晩年には型物の香合を造って居る。型物も、一光の作品の重要なものの一つであると考えられる。二代一光は父に彫刻をも教わったものか、彫刻的なものは実に上手で全く他の追従を許さない。

## 水 指

金沢時代に製作したものは染付で粗画を描いた渋いが貴品の高い作品があり、京都時代には仁清風のものを作り、轆轤でしたものもあれば、捻ったものもある。絵付は一般に草花を描いたものが多い様であるが山水を付したものもある。一光は花鳥画も巧いが山水も非常に巧みで、これ程絵の画ける陶工は一寸少いと思う。

## 急 須

一光は急須や、ぼふう、土瓶の類を造る名人であったと言える。特に捻りで造った急須は天下一品で真に他の追従を許さず締焼のものも多く、非常に薄手で、掴みにはよく禽獣をつけている。持手は一般に長めで使いよく造られて居り中には輪の様にしたもの等変わった形もある。作品は割合に多いが、絵付をしたりしたものは少い様である。

これ等一光の作品で蓋のあるものは蓋と身の合され具合はピッタリと実に見事に出来て居り一光の器用さが最も良く発揮されて居て、一光の作品の特徴の一つであると思う。又その両方の調子はよく取れている。

## 花 生

花生は金沢時代の作品で締焼の掛花等に秀れたのがあり、器用な技巧等は表面に出さず、落着いた感を持って居り、花を生かす様に過度な装飾等はして居ない。この点一光は若い頃より花の修業をしていたことが生かされている様に思う。

## 皿

一光の作品中最も重要なものの一つであろうと考えられ、相当に多数造ったと思われる。金沢時代の中でも卯辰山時代には一般に大皿を造り、それに染付で粗画などを描いたものが多く、渋い古淡な味を持ったなかなか良いものがある。卯辰山時代以後は、中皿又は小皿の類を主に造ってをり、種類も南蛮風の土味を最大限に生かしたもの、又染付で粗画を描いたもの、上絵もの等多種多様であり、京都時代には好んで絵変りの小皿等を造った様である。一光は絵が上手であったのでこの絵変りの小皿等は、最も面白いものの一つである。

## 鉢

金沢時代に作った鉢には佳品が多く、陶工としての技倆が最もよく現われて居る様に思われる、種類も多く、土味をよく生かして居り、東金  
山城の印の入った手鉢があるが、釉薬の掛け方も面白く、絵付も潤のある筆致で描いてある。薄手のものであるが、持手がよく全体と調和して、すっきりと纏って居り、一光の代表作の一つと思われる。

## 置物

仁清の稚子を写したものやその他鴛鴦等の鳥類や動物又人物も造って居り、特に観音は幾つか製作した様である。

置物は小さなものから一尺以上もある大きなものまで相当に造った。人物の方は一般に締焼風で着色も地味であるが、他のものは克明に彩色し、形も精巧に出来て居る。

一光のこれ等の作品を見ると絵付にしても、人物や禽獣等の彫刻的なものでも一般に写実的なものである。

## 盃

轆轤で造ったものもあれば、捻りで作ったものもあり、種類もなかなか多く作品は呑みよい様器用に作ってあり、盃の様な小品でも絵付をしたものの絵は一般に非常に良く出来て居る。

然し、器用さが目立ち過ぎる傾向があって、かえって弱く感じさせるものもある。

## その他

パイプや簪の玉等を作って居り、殆んどすべての作品は締焼のもので、龍や観音等の非常に細密な彫刻を施して居る。簪の玉は殆んどすべて無銘であつたらしいが、当時の金沢の遊女等は一光の作った簪を髮にさすのを一種の誇りにして居たそうである。

## 人 物

一光に直接逢って識って居る人達の殆んどが、一光は変わった人だったと言って居る。それだけに逸話も多い様である。

一光は常に「自分は14才の時から誰に教わることもなく一人で製陶の勉強をしたのだ」と言っていて居たそうであり、苦勞をただけに自分の作品には非常に厳しかった様で、全くの名人気質の人であった。気の向いた時は徹夜でも仕事をするが、気の向かない時は横から誰が何とて勸めても全く仕事をしなかったそうである。

作品は今まだ相当に現存する様であるが、それにしても寡作な人であった様で、家人は今少し品物を造ってくれたら生活も楽になるのにと居てもその様な事には一向に無頓着で、全くの貧乏暮しでも、お金の事を言うことは禁物であり、気に入らない作品は快心の作が出来た迄何度でも造り直しをし焼成したものでも気に入らないものはすべて毀してしまい、決して人には渡さない様にして居り、時に家人が黙って人に渡したりするとひどく叱かったそうである。

一光は金で仕事をしたり、自分の作品を売ったりする事を嫌い、或時等は金を持って来て品物を頼み、余り品物の出来るのが遅いので催促に行ったところ、棚の上に紙に包んだままになって居た金を返し品物はとうとう作らなかつたそうで、この点中々気難かしかったそうである。

この気質は生涯を通じて変ることなく製品がどんどん売れる時でも、作品を売って金にするよりも、作品を質屋に持って行って金を借りることにして居て、出来るだけ親しい人にだけ渡す様にして居たそうである。又、晩年清水のある窯より高給で教えに来てほしいと言う話があった時などは、金をくれるなら行けぬが、唯でなら教えに行くと言って無報酬で教えに行って居たと言う事である。

熊谷師に聞いた話では、或る時本願寺で本願寺焼とか言うものを始め度いが、誰か良い陶工は居ないかと相談を受けた時、「自分の昔から知っている横萩一光と言う陶工が居るが、この人は既に名人と言われて居り、腕は確かであるが名人気質で気難かしく、扱い難い人物であるが、一光が引き受けしてくれれば確かである。」と言ったところ、本願寺では乗り気になり一光にさせたく思ったが気難かしやの一光が果して引受けて来れるかどうか解らないので本願寺では一策を案じ、とにかく一光を本願寺へ呼んで来る事にし、それには一光に本願寺焼などの話は一切せずに本願寺の門跡が一光に逢い度いと言って居られるが、一度来てもらえないかと言う風に話をして熊谷師が一光を連れて来たそうである。

本願寺では一光に唯頼んだのでは面白くない、先ず一光の名人気質のその出鼻を挫いてからでないと駄目だと言うので、本願寺伝来の名宝を一光に見せて話をする事にし、箱等はわざわざかくしておき、種々話のあい間に、本願寺にこの様なものが伝わって居るが、これは如何なるものかと品物だけを見せたところ一光はうまくそれにひっかかり、「これ程の品物ならば、さ

ぞかし箱も立派で何か箱書もしてある事であろう箱も見せて貰いたい。」と言い出した、そこですかさず名人と言われる横萩一光が品物を見て解らず箱を見たいとはどうした事か。」と言われたので、一光も参ってしまい本願寺焼をあっさり引受ける事になったとの事である。

然し、この本願寺焼については本願寺へ問い合わせたが詳しい事は解らなかった。一光は変人と言われる位に気難しい所があった反面、話し好きで人をそらさない所もあったそうで體格は大柄で頑丈な人で酒は余り飲まなかったそうである。

趣味としては囲碁が好きで仕事をしない時は常に蒸し菓子を喰べ、玉露を飲みながら一人でも囲碁をして居たそうで碁は三代一光も妻の「阿以」もなかなか強いそうであり、「阿以」手でなどは正式に先生について習ったそうで定石を書いたノートを今も持って居られる。一光は右石を持ち左手で膝を撫るのがくせで着物の左の膝の所が何時もよごれて居たと言うことである。

おかうずしや甘い蒸し菓子の類が好きで、よく金沢の森八のお菓子を喰べていたそうで、着物も非常に良いものを着、お茶とお茶の道具は旅行をする時などには必ず持って行き、お茶は何時も非常に良いものを飲み、決して旅館等のものは飲まなかったそうで、茶道は裏千家流であった様であり、生花は誰に習ったのか解らないが、古流であったらしい。

生活態度は実に謹厳で、人と話す時は必ず正座をし決して膝を崩すことはなかったということである。

一光は不断はそれ程信仰深い人とは見えなかったが死ぬ数日前より、「仏が迎にお出た有難いことだ、自分は何日に死ぬ。」と言って居たそうで、丁度その日に死亡したそうである。

### 三代横萩一光

#### 略 歴

三代一光を継いだ一造は明治19年2月12日二代一光の三男として金沢で出生した。長男金治郎も一時はやはり製陶の方を習っていた様で富田忠男氏の話では京都五条坂の光山の所で暫く仕事をしていたそうである。然し、陶工として立つ程には至らず割合に若くして死亡した。二男光治は画家にする心算であったが造船の方に進み、結局三男が陶工として三代一光を継ぐ事になった模様である。



製陶を教わったのは父二代一光が京都へ行ってから直接習った。三代一光は二代一光の如く各地を点々とする事なく専ら京都市清水4丁目61番地の自宅で製陶した。二代一光は晩年に金沢へ行く事を進めていたそうであるがそれは実現せずに終った。


父の代からの知人である熊谷師に可愛いがられしばしば本願寺関係の仕事もしたそうである。

横萩家は長男金治郎の嫡子光雄が継ぎ三男一造は戸籍の原本によれば

東山区清水4丁目161番地 戸主 横萩光雄叔父分家届出 昭和16年9月17日受付。とな  
って居て分家した事が解る。然し、分家後もずっと本籍の清水4丁目に居た様である。54才  
の時発病し、数年臥して居たが、60才で死亡した。戸籍の原本には  
昭和20年1月27日午後2時本籍に於て死亡同居者横萩阿以届出同月29日受付と書いてある。

### 銘

若い頃は都東山一造と号し作品には主に小判形の二重枠の中に一造と書いた  の印を用い  
たが、父の二代一光が歿してからは「臥龍山一光」を襲ぎ作品には二重輪画の中に一光と書いた  
 の印を捺し、大きさは大中小幾種類かのものがあった様である。

布印は瓢箪形の中に一光製造と書いたものを使い、箱には「臥龍山一光造」等と書き四角の  
中に横萩と横に書いた  の印を捺した。三代一光はこの様に自分の印を作って父の使っ  
ていた印は決して使わなかったそうである。

### 作 品

三代一光も器用な人であり、優れた陶工であった父に習っただけに、その作品はなかなか面  
白いものがある。

轆轤は上手であり、捻り物も作り、急須の抓み等にはやはり禽獣を付けたりしている。出来  
の良いものは二代とそっくりなものもあり、特に犬や鼠等の動物を作る事が得意であったそう  
である。

然し、その作風は二代一光程の幅はなく、二代一光の仁清風のものや、締焼、捻り物等の或  
る一部分を受け継いだものと考えられる。三代一光は絵が完全にこなせなかった様に思われ、  
それが作風の幅を狭くしたと考えられる。結局二代一光の京都時代の作風を継いだか、独自の  
様式を作り出す所迄は行けなかった様である。

然し、締焼の土瓶等が現存し、釘彫りで粗画や、漢詩などを書いた雅味豊かなものがあり、  
この様なものの中に佳作がある。

一体に雅味を狙ったものよりも仁清風の派手なものも多く、晩年には戦争のため、絵付に使  
う金銀が手に入らなくなったりして十分に腕を振えなかった様であり、「阿以」の話では二代一  
光は晩年に「この次自分がこの世に生れて来ても陶工にはならない。」と言っていたのに反し、  
三代一光は「自分はもう一度陶工になる。」と言って居たそうでこれによっても二人がそれぞ  
れどの様なものであったかが解る様に思われる。

## 結 び

三代一光には子供がなく、他にも陶工を継ぐ者がなかったので三代をもって終ったのであるが、二代一光は技術、人物共に優れ明治の高僧石川舜台や漢学者黒本植等とも友人として交際をして居り、これ等の人々に感化されることも多かったと思われる。

然し、この優れた陶工であった二代一光の与えた影響もなかなか大きく、

鳥倉二三郎、富田時太郎、山森十太郎、等も弟子であり、かつての鶯谷久田窯は、規模こそ縮小されたが現在もなお続いて居り、福光で製陶を業として居られる松村秀太郎氏は、二代一光の弟子であった加藤浅吉に陶法を習われたそうである。

又名工鶯谷庄平も、かつては一光の弟子であったことを思えば、作品に現われた業績は勿論であるが、これ等後輩の指導にも相当に力を入れた様で、その功績も見逃がせないものがある。

陶芸界は当時より既に分業になりつつあり、どうも味気ないものが多くなる傾向の中で、二代一光は総てを自分自身で為し、そのために作品は一般に各々がそれなりに纏って居り、しかも味のあるものを造って居る。以上の事柄から考察して、二代一光は確かに明治・大正時代に於ける名工の一人であると思われる。